

平成25年度 算数科の授業改善のための方針

1 本年度の方策

① 授業で生かす

- 算数的活動を充実させて、基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けさせ、数学的な思考力・表現力を育て、学ぶ意欲を高めるようにさせる。
- 算数の少人数学習指導の導入により、学年間の系統性を重視した指導や、発達や学年の段階に応じた反復（スパイラル）による指導を充実させる。
- 課題解決の見通しをもち、根拠を明らかにし筋道を立てて考え、それを説明させる活動を重視する。
- 言葉や数、式、図、表、グラフなど用いて問題を解決させたり、自分の考えを表現し伝え合ったりさせることなどの指導を充実させる。
- 学ぶ意欲を高めたり、意義や有用性を実感したりできるようにする。そして、日常生活や他教科の学習に活用していくことを重視する。
- 数や量の大きさ、図形についての感覚を豊かにする活動を重視する。
- 評価について少人数各クラスで検討し、評価を共有している。

② 全校で生かす

- 言葉等による表現力を育てるために、ノートを活用する。（自分の考えの足跡を残すようにしている。）
- 様々な考えを出し合い、互いに学び合っていくことができるよう指導を充実させる。
- 個に応じた指導を進める。
- 体験的学習を重視する。
- ねばり強く最後までやり遂げる態度を育成する。
- 家庭学習を啓発する。
- 道徳教育との関連を考える。
- コンピューターなどの活用を図る。

2 児童の実態

- ★ 今年度5年生が実施した『平成25年度 児童・生徒の学力向上を図るための調査』では、「知識・理解」については正答率が高いものが多いが、知識を活用して推論し解決する問題においては正答率が50%を切っている。「数学的思考力」については正答率が80%を超える問題も多く、筋道を立てて考え問題を解決する力が身につけているといえる。「表現・処理」については問題によってばらつきがみられる。[数量や図形についての技能]の問題は正答率が70%に達している。しかし、小数の引き算の筆算の誤答を正しく計算し直す問題では正答率が60%を切っており、筆算の仕方の理解に課題が見られる。
- ★ 全体的に見ると、個別指導の必要な児童が多い。数の量感や図形感覚が育っていないため、課題解決のイメージがつかめない児童が多数いる。まじめに学習する姿勢はあるが、自分で追求的に考えたり全体の中で説明したりする活動を苦手とする児童が多い。既習事項を活用したり、発展的に考えたりする力が十分に身に付いていないといえる。

学年	問題点	重点目標
1年	計算問題を解くことはできるが、正確さが低い。	見直しの習慣を付けさせる。
2年	問題解決の方法を考えることに苦手意識のある児童がいる。	既習事項を活用し問題を解決する方法を考えさせる。
3年	計算問題はよく解けているが、思考力を伴う文章問題の正答率がやや低い。	授業中の「自分の考え」を表現させる時間を確保し、個別に支援をする体制を作る。
4年	計算力はあるが、考える力が不足している。	問題を時間をかけ最後まで考えて解かせる。
5年	人に意見を参考に自分の考えを再構築するのが苦手。	「言語活動の充実」により学習が深まるように工夫する。
6年	友達の考えを取り入れる際に、数・式・図・言葉を写すだけの表面的な表現になりがちである。密度と速さの単元に課題が見られる。	友達と同じように表現することを認め、異なる考えを比べて共通点や相違点を見つけさせる言語活動を行う。

3 平成24年度の成果と課題（☆成果 ●課題）

- ☆ 成果（児童）
 - ノートに自分の考えを書き表す力が、少しずつついてきた。
 - 習ったことをもとに自力で課題を解決しようとする態度が身に付いた。
 - 友達の考えと自分の考えを比べて、同じところ・異なるところなどを自分の言葉で説明できる児童が増えた。
- （教師）
 - 既習事項や学習内容の発展を見据えた教材研究によって、教材の見方を深めることができた。
 - 少人数指導によって、より細やかな実態把握と、それに合った指導を工夫できた。
 - 各学年の算数コーナーには、学習の足跡として活動中の児童の様子や、児童の考えを掲示し、保護者に学習状況などを伝えることができた。

● 課題

- 考え方の定着に個人差がある。課題解決が困難な児童への指導や手立てを考えていく。
- 課題掲示の仕方を工夫し、興味関心をもって課題解決に取り組ませるように工夫する。また、生活の中に教材を見つける工夫などにより、活用力の育成につながる課題を考えていく。
- 人に意見を参考に自分の考えを再構築するのが苦手である。「言語活動の充実」により学習が深まるよう工夫する。